**所得分配と貧困の関係変化における都市化の影響分析**

**―アメリカのケース―**

玉井敬人　(九州産業大学)

所得分配・所得格差問題と経済成長の分析は理論的にも実証的にも豊富に存在する。代表的なものとしてKuznets, S.の逆U字、それを地域に応用したWilliamson, J.の逆U字がある。Kuznetsの逆U字は簡便にいえば一人当たり所得と不平等度の関係を指摘したものであるが、これは経済成長と不平等の関係が通時的に変化することを意味する。ではこの経済の発展段階を一面示した所得水準と所得分配の関係について、空間的視点を加味した場合にはどのようなことが言え、またどのような視点を以て分析することが重要であろうか。

報告では戦後アメリカのケースを取り上げ、所得分配の変化をもたらす諸力について、特に都市化といった空間的視点から分析する。そこで、まずは地域・都市経済学において所得分配・不平等はいかに取り扱われているか整理する。その上で加味すべき視点を論じる。

地域の分析単位として州を設定しつつ、これまであまり分析されてこなかった所得分配と都市化の関係および、不平等度の変化要因について検証したい。また、この検証のなかで所得分配の特徴が年々変化してきていること、すなわち、不平等度と貧困の関係が変化していることを明らかにする。そのうえで両者の関係変化をもたらしている要因として都市化の影響を実証的に分析するものである。

都市の形成においては製造業の立地が重要であり、また地域における所得水準・所得分配の点からも製造業の重要性がこれまで認識されてきた。特に所得分配の点からいえば、同産業は中間所得者層形成の核となる位置を占めてきた。1970年代以降、アメリカ製造業の衰退が顕著であるが、同産業の趨勢と都市化、そして所得分配変化の関係にも注目したい。